

東都大学野球1部昇格

硬式野球部

6季ぶりに1部昇格決める

渡邊洋平投手が

ノーヒットノーラン (第2戦)

その瞬間、涙する学生も

神宮球場が歓喜で沸きあがった。グラウンドでは最高の笑顔で選手たちがとび跳ね、抱き合う。1塁側スタンドの中大応援席では、「やったあ〜」「ヨッシャ!!」の大歓声。感極まって涙する学生の姿も。

6月9日、東都大学野球春季入れ替え戦で、硬式野球部が悲願の1部復帰を決めた瞬間だ。1勝1敗で迎えたこの日の決戦で、中大は4ー2で駒大(1部6位)を下し、2勝1敗として2005

年秋以来、6季ぶりの1部復帰を果たしたのだ。9回表駒大の攻撃も2アウト。決定的瞬間を観ようと、1塁側スタンドは総立ち。中大応援席の人数は前日の第2戦よりは少ないものの、声援は前日以上の盛り上がり。試合途中には、雨脚が強

くなったが、それにも怯まず熱い応援を送り続けてきた応援席はまさに最高潮に達した。

マウンドには、前日ノーヒットノーランを決めた渡邊洋平投手(商学部1年)が立っていた。この日は7回途中から登板した渡邊投手は、前日の好調を保持し、9回、駒大の最後の打者を切って取り、有終の美を飾った。

「母校を誇りに思う」とOB

前日も見かけたOBの鍵谷芳勝さん(昭和49年法学部卒)の姿が、この日もあった。「よかったねえ。嬉しくて涙が出る。自分の母校を誇りに思う」と言葉を詰まらせた。同じくOBの清水康弘さん(昭和38年経済学部卒)は、「よかった。よかった」と感激にひたっていた。

試合後、球場の出入り口では、帰らずに選手を



応援歌で熱気もさらにアップ

向かえようと多くの人が集まっていた。中大の選手が出てくると大きな拍手が起こり、「よくやったぞ!!」、「お疲れさん」、「ありがとう」といった声飛び、選手の健闘をたたえた。

学生、OB・OGで埋まった第2戦

7日の初戦の敗戦(中大2ー4駒大)で、後が無くなった8日の第2戦。日曜日ということもあり神宮球場には、多くの在学生、OG・OBが応援に駆けつけた。中には、山口や盛岡から駆けつけた人もいた。試合前には、校歌と『あゝ中央



肩を組み、歓喜の学生応援団

の若き日に（中央大学応援歌）の斉唱。そして、大学野球ならではの中大、駒大両校応援団によるエールの交換が行われ、3塁側の中大応援席は、試合前から大いに盛り上がりつつあった。

「今回は応援に来てって、本人から言ってきたんです」と話すのは、野球部マネージャーの池田実奈さん（法学部4年）の母、章子さん。「野球のために大学に行っているみたいで、親としては心配なんですけどね」とはいうものの、応援には自然に熱が入る。

「中大の応援に来るのは学生時代以来だ」というのは、鍵谷芳勝さん（昭和49年法学部卒）。「昔の野球部はとても強かった。今の中大野球部が1部が上がってくれたらいいと思って来ました」と熱い視線をグラウンドに送る。

「高橋監督で、かわった」と野球部ファン

「毎試合、観に来てるよ。練習試合も八王子に観に行ってる」というのは、『中央大学硬式野球部を優勝させる会』の九里芳樹さん（昭和39年理工学部卒）だ。「入れ替え戦だから特別に来たというわけではないよ」という根っからの野球部ファンである。

同じく同会メンバーの清水康弘さん（昭和38年経済学部卒）は、「監督が高橋善正監督になって、全然変わったよ。スクイズ、バント、投手交代が上手くなった」と解説、言葉にも熱がこもる。

この日、3塁側スタンドの中大応援席最前列には、久野修慈理事長と永井和之総長・学長の姿があった。校歌、応援歌を歌い、選手たちに熱い拍手と声援を送る。

「全国制覇するくらいに」と久野理事長

久野理事長は、野球部について「力をつけてきている。高橋監督には期待している。全国を制覇するくらい強くなってほしい」と激励。また「野球を通じて国際交流がどんどん増えてくる。中国からも選手が出てきているし、そういった選手が

中央大学でプレーする日も来る。アジアからの選手が活躍すれば、中央大学を国際的にアピールできる」と先を見通された。そして「学問も重要だけどスポーツも重要だよ」と笑顔で学生記者の質問に答えてくださった。

「応援で団結できる」と永井総長・学長

隣りで、一際熱いまなざしをグラウンドに向けていたのは永井総長・学長だ。学生記者の取材に、「中大はキャンパスが多摩に移転したため、駿河台で過ごした世代は学生時代の思い出を見つける場所がなくなってしまった。だけど、神宮球場に応援に来れば、昔と同じ。タイムスリップできる場所



声援を送る久野理事長（中央）と永井総長・学長（左）



1部昇格を決め、抱き合って喜ぶ中大ナイン

だと思いません」と中大OBの一人としてコメント。
また、「キャンパスでは学部を超えて学生同士が活動する機会がなかなかないのが現状。まったく知らなかった学生同士がすぐに打ち解け団結で

きるのが、応援という活動のいいところ」と応援席で声援を送る在校生を振り向きようにして話された。
その応援席中段に、女子学生4人組がいた。チ

アリーディング部の新入部員だという。まだ先輩たちと一緒に応援はできないが、応援団のリードに乗って「楽しい!!」と先輩たちに負けじと声をからしていた。

「もう友達だよ」と 応援の学生同士

一段と大きな声を張り上げていたのは、小森一摩君（法学部1年）ら10人ほどの男子学生のグループだった。小森さんは、「1部と2部では全然違うから」と中大の1部昇格を願って、初めて神宮球場に足を運んだという。

「サークル仲間など、みんな俺の友達だけど、今日初めて顔を合せて話をしたのもいるんだよ。でも、もう友達だよ」と小森さん。中大が得点すると、み

んなで交互にハイタッチ。そして立ち上がった肩を組み、「まだ覚えていない」という応援歌に唱和して喜びを爆発させていた。

12年ぶりの歴史的試合観た応援席

試合は、2回表に中大が2点を先制、渡邊洋平投手（商学部1年）の力投が続いていた。5回を過ぎたあたりから、「まだノーヒットだよな」の声が応援席からもれはじめた。渡邊投手は7回に入ってもまだ打たれていない。駒大打線を完全に封じ込めている。

「もしかしたらノーヒットノーラン、いくんじやないか」

「いや、それを言っちゃだめだ。それを口にしたとたんに打たれちゃうから」

応援席の会話に真剣みが増していった。ついに9回まで来た。「あと3人」コールが「あとひとり」になり、「あと1球」になった。応援席は総立ちで、「ウォー」の声を張り上げ、駒大のバッターをけん制。最後はこの日、11個目の3振。渡邊投手がノーヒットノーランを達成したのだ。

1996年春以来となる史上2度目の入れ替え戦でのノーヒットノーランである。この日、応援に来た中大関係者は歴史に残る試合に立ち会えたのだ。この勢いが、6季ぶりの1部復帰を決めた翌日の勝利につながったの言うまでもない。

（学生記者 上田雄太Ⅱ文学部3年／石川可南子Ⅱ法学部1年／橋本あずさⅡ法学部1年）